

第33回地域づくり団体全国研修交流会石川大会

フォローアップ研修会

<全体スケジュール>

13:00

■主催者あいさつ

13:05

■石川地域づくり表彰

○表彰状授与式

○受賞団体の活動紹介

・特定非営利活動法人金澤町家研究会

・認定特定非営利活動法人えんがわ

・花咲く湯涌・まちづくりネットワーク推進プロジェクト

○審査講評

14:00

■石川大会のフォローアップ

○ゲスト講師によるオリエンテーション

・柳井 雅也 先生（東北学院大学 教授）

・敷田 麻実 先生（北陸先端科学技術大学院大学 教授）

○ふりかえりワークショップ

○シェアタイム

17:00 全体会終了（終了後、交流会開催）

1、主催者挨拶（藤崎雄二郎会長：県企画振興部長）

第33回地域づくり団体全国研修交流会石川大会フォローアップ研修会にご参加いただき誠にありがとうございます。昨年は全国から260名を超える地域づくり関係者をお招きし成功裏に終えることができました。本日は、全国大会のフォローアップを行い、議論の整理や参加者のネットワークを通して、更なる地域づくり活動に繋がっていただきたい。地域づくり表彰に続いて受賞者の事例発表を行います。先進的な活動を実施された団体、個人の皆様に敬意と感謝を申し上げます。また、本日、ゲストとしてお招きしました柳井雅也先生、敷田麻実先生。そして、準備や運営にご協力いただいた皆さんに感謝を申し上げ、開会の挨拶といたします。

<石川地域づくり表彰>

会長：受賞された皆さん。おめでとうございます。皆様の主体的に関わる活動こそ、地域づくりにととても重要であります。引き続きご活躍いただきますことをお願い致します。

2、受賞団体の活動紹介

①特定非営利活動法人金澤町家研究会（川上光彦氏）

金沢の武家、商家などの歴史的な建造物を総称して町家と呼び、昭和25年以前の建物の保存活用を行っている。町家は年々減っている。毎年100軒が無くなっている。現在、町家は7500軒くらい残っている。

空き家が増えコミュニティ活動が弱っている。町家の利活用は新しい取り組みで、金沢市と連携している。昨年6月で10年目になる。初期の頃は町家の実態調査し、その後は町家や蔵を借りてセミナー、研修会などの実験イベントを開催してきた。また、「優良金澤町家」を認定し、認定証とプレートを授与してきた。これまで112軒の認定を行った。

空き家コーディネート事業としてユーザーとオーナーのマッチングを図り、4ヶ月で20件の成約に繋がった。

<赤須コーディネーター進行による質疑応答>

質問（森山コーディネーター）－町家のコーディネーターの役割は何か。

応答（川上氏）－改修などアドバイスしている。160件の登録がある。空き家バンクや民間不動産の情報を取り入れてコーディネートしている。

赤須（進行）－専門家とのコラボで調査、分析、実験し、そのことを行政が評価し、実施したところに成功の秘訣があるのではないか。地域づくり活動にはプロの力が必要。

応援メッセージ

金沢の空き家はすごいぞ。町家コーディネートのノウハウを売ってください。町家に種類があるんですね。興味がわきました。

②認定特定非営利活動法人えんがわ（中田八郎氏）

能美市寺井地区湯野小学校下は能美市の中心地域にあり、35年前に近隣の地域から集まった新興住宅地で1700人が住んでいる。少子高齢化が進みつつあるがバランスがとれている地域である。

活動としては①週1回、希望の高齢者を送迎する買い物支援②地域の困りごと支援③空き店舗を活用した「ふれあい市」④健康づくりをサポートする体操教室⑤居酒屋を借り切った「いきいきサロン」⑥障害者の送迎⑦草刈ボランティアなどを実施している。

地域の困りごと支援は月2回、一人40分無料で実施している。行政の相談窓口は敷居が高くて利用しない人が利用している。相談員は金沢市や白山市からの専門家をお願いしていて顔馴染みでないことが利用を高めている。相談される大半は一人暮らしの女性で、相談内容は遺産相続や子どもの相談、交通事故の被害相談が多い。

<赤須コーディネーター進行による質疑応答>

質問（赤須コーディネーター）－女性の顔が見えない。どんな役割を果たしているのか。

応答（中田氏）－女性は1／3いる。主に草刈をしてもらっている。また、独居老人の部屋の掃除もお願いしている。

質問（谷口運営委員長）－NPOで居酒屋を作るのは面白い企画だ。どんな人が利用しているか。

応答（中田氏）－12、13名が利用している。長い間誰とも会話したことが無い一人暮らしの男性の利用が利用するなど、引きこもり老人を無くする効果がある。女性も利用している。居酒屋を切っ掛けにスタッフになってもらうなどの、事業などの参加の機会をつくり活性化を図ることが狙いである。

応援メッセージ

これからの町内会のモデル！素晴らしい。これからの社会に必要な取り組みです。独り暮らし男性のための居酒屋！面白い取り組みだと思います。

③花咲く湯涌・まちづくりネットワーク推進プロジェクト（北幹夫氏）

湯涌は開湯1300年、前田藩の隠れ湯、氷室の雪詰め、花咲くいろはの聖地巡礼で年間1万人が訪れる地域。

人口減少のスパイラルに陥り、小学校の存続危機感から町会連合会の傘下で結成しプロジェクトをスタートさせた。地域資源の発掘・調査から始め移住促進活動を展開している。

移住定住ワークショップでは10年後の人口予測し、移住してほしいターゲットを絞り、移住体験プログラムづくりや受け入れ側のルールづくりを行った。

交流人口の拡大のため市の助成を受けて、秋に「湯涌まるごとフェア」を開催してきた。設営の経費、天候の不安、売り上げの課題など、自立運営に無理があるため、四季ごとに即売市、空き家の見学会など移住促進プログラムを加えた内容に切り替えてきた。

移住促進プロジェクトでは、町会長の協力を得て空き家、空き地調査を行い、R不動産と連携しながら移住を進めてきた。これまで、2件4人が移住し、市との連携により年間10人の移住が見込まれる。

当地域は市街化調整区域の制限があり移住を阻害している。今後、市街化調整区域の見直しなどを行政への要望していきたい。

<赤須コーディネーター進行による質疑応答>

質問（赤須コーディネーター）－人口が増えれば良いと思うか。

応答（北氏）－移住は新しい血、風を入れる効果がある。学校を無くさないためには若い夫婦の移住が不可欠と思う。

応援メッセージ

ミラクルすごい！普段のたゆまぬ連携があつてこそ。アニオタを地域の力にしていく挑戦に期待します。アニメと地域づくりがすごい。

3、審査講評（谷本互審査会座長）

特定非営利活動法人金澤町家研究会は、地域の情報発信として調査やコーディネーター活動が高く評価されました。認定特定非営利活動法人えんがわは、新興住宅地の自立支援、買い物支援、相談窓口、店舗活用などが評価され、市民自治のお手本になると思われます。花咲く湯涌・まちづくりネットワーク推進プロジェクトは、地域活性化のため校下、地域の中核として機能している点が評価されました。かなざわご近所コラボプロジェクトは、地域コミュニティーの在り方や価値の見直し活動が評価されました。栗津駅前商交会は、活動歴の70年の継続した活性化の取り組みや地域住民との協働が評価されました。新弘之氏は、コミュニティービジネスとして、製品のブランド化やその貢献、組織のリーダーとして大きな力を発揮され、他の地域から先行事例として注目されていることが評価されました。

今回の大賞及び個人部門を受賞された受賞者は、来年度の総務省の「ふるさとづくり大賞」にエントリーさせていただきます。

4、全体会

<森山コーディネーター進行>

森山奈美：ここ数年、円陣の開催内容は全国大会に向けて活動してきました。分科会の開催目的や到達目標などについて「ねりねりWS」などを通して団体にシェアしてきました。今回は、実施後の評価や今後の団体活動への指針になることを目的に「振り返りシート」を使ってフォローアップする重要なものです。分科会主催者はもちろんですが、分科会に携わらなかった参加者の皆さんも参加することで、活動のフォローアップのやり方を学ぶことができるものです。

WSの前に、2人のゲストからフォローアップに繋がる視点をミニ講義させていただきます。

<ミニ講義>

①柳井 雅也 先生

地域づくり団体は全国で5044団体あり、反応のあるのは2000～3000団体で、活動の停滞や休止している団体が多く実態調査する必要があると感じている。全国協議会は講師派遣事業（講師派遣に15万円の助成）、月刊誌の発行、HPでの情報の提供などを行っている。都道府県ごとに協議会等が設置されているが、活動が停滞している県も多い。その中であって石川は熱心な活動家が多く、県組織の活動は活発である。

昨年、石川で開催の全国大会は、分科会と全体会を逆転させ意見の深堀りができた良い大会だったと思う。全国大会が石川大会のように充実させるため新規事業として、全国大会の開催前に開催地において次期開催地のコアを交えて情報交換会を開催する計画である。

折角の機会なので、地域づくり活動におけるWSのヒントについて土産にしたい。

《WSのヒント》

①イノベーションを起こす

- ・社会的な価値を新たに創造する（差別化、個別化）

②シームレス

- ・団体や事業内容の垣根を超える
- ・人材が繋がる アイデアが繋がる 地域資源が繋がる

③ITを活用する

④売れ筋の商品をつくる

- ・マーゲッティングをきっちりする
- ・ストーリーを売る（苦勞、物語）ストーリーを売るテクニックをつける
- ・地産地消でなく地消地産の視点が重要
- ・一つのことだけでなく地域資源を結びつける
- ・クラウド・ファンドを活用
 - 「年貢を納めて集落民になろう」で人と財を得た例
- ・目に見えない知恵も含め地域資源に

②敷田 麻実 先生

地域資源を活かした地域づくりの基本について話したい。地域づくり活動は他種多様で複雑に見えるが、良く見ると幾つかのタイプに整理できる。特徴をうまくとらえ共有するためにサーキットモデルとしてわかりやすくすると理解しやすい。

サランラップは知っているが、何故サランラップと言うのかは知られていない。元々は、軍事物資を包む目的でサラとアンが考えた製品である。ピクニックでサンドイッチを包むために余っていたその製品を使ったことからサランラップと呼ばれるようになった。時代とともに、本来の目的と異なった使い方が主流になった例である。

地域づくりの意味が時代とともに異なってきている。70年代は、インフラが整備されていないため公民館や施設を立てることに重点が置かれた。80年代からは、インフラが整い隣町と差がなくなったためテーマ型になった。2000年以降は、テーマ型でも満足できなくなった。社会も個人も満足するガバナンスを重視するようになった。そして、効率だけでなく文化を大切にするようになった。

地域づくり活動を「夕鶴」に置き換えると分かりやすい。「与ひょう」に助けられた「つう」は、お礼に千羽織を織り商品をつくる。愛の暮らしで十分な「与ひょう」は売り方を知らない。「運ず」「惣ど」は、都で高く売りさばくマーケティングを知っている。いつしか「運ず」「惣ど」の金儲けに「与ひょう」は引き込まれていく。そして、「つう」に千羽織の増産を迫り、結局は破たんし追い込まれたと言う話である。愛の暮らしを夢見ていたはずなのに元も子も失ったのである。地域づくり活動も、理想と現実のギャップの狭間で良く似た事が起きている。

地域づくり活動には①地域外の人を呼び込む②地域の夢を育てる③ブランド化をする—のパターンがある。課題として、生産性が無いのに圧力をかけ資源破たん

する。生産性をあげずに破たんするわけである。

生産者と消費者が一緒になっていることを意識しなければならない。そのモデルパターンは共通している。①自分達の中につくりだせるか②発生する場所はどこか③活動の質が違いは何か④メディアを通して共感が形づけられるかである。

地域づくりの行動パターンとして①地域づくりに参加する人が知識や情報を出し合う②ネットワークで結び付き知識や情報を共有する③知識を具体的な成果に変え、外部に向かって発信する④表現した成果が外部で評価され、良いイメージが形成されるのである。そして、バージョンアップさせサーキットを回すことが次の活動へ繋がるのである。

5、ふりかえりワークショップ

＜森山コーディネーター、濱コーディネーター担当＞

分科会に分かれ、個々に「ふりかえりシート」に落とし込む。分科会の総意をまとめとしてシートに書き出す。

6、シェアタイム

＜濱コーディネーター進行＞

《分科会発表》（挙手順で発表）

【第10分科会】

能美市は高齢者が頑張っている地域。住みやすい町で全国第3位。高齢者がリーダーシップをとっている。高齢者から若者に引き継ぐことが課題。後継者に時間と経験がある方を育てる必要がある。

自己評価：100点

加 点：えんがわの店舗、九谷焼きの視察の評価が高かった。

減 点：詰め込みすぎで時間が足りなかった。タイムキーパーが必要。

夕食時間が多く、揚げ物が多くクレームがあった

追 加：勉強会の評価が高かった。

地域の後継者として65歳の人を募集し育てる。

行動宣言：－

【第2分科会】

分科会運営にあたって、協会コーディネーターによってWSを取り入れたことが良かった。皆が話せて共有できたのが良かった。準備が良かったためスケジュール通り実施できた。また、参加者のアイデアで「開花前線をつくる」「赤に着目して、還暦記念として能登キリシマツツジの植栽」が出た。実施に向けて進めたい。

自己評価：80点

加 点：運営にWSを取り入れたことで、これまで発言しなかった人の意見が集約できて良かった。

減 点：当初からWSを取り入れれば、もっと内容の良いものになった。

行動宣言：赤い花で若返り

【第4分科会】

若者が地域に入って挑戦する物語を審査することで、いろいろなヒントや課題が見えてきた。事前にインターネットで情報交換したことで運営進行がスムーズになった。公開選考にチャレンジできた。

自己評価：80点

加 点：お散歩セミナーでは地元区長が多忙の中にも関わらず対応してくれた。今後の繋がりになる。遠隔者とインターネットでのやりとりができた。

減 点：インターンの基礎知識のインプットがなかった。移動が多すぎた。

行動宣言：若者を活用した地域のイノベーションをパッケージ化として活動

【第8分科会】

少子高齢化による地域衰退の課題について参加者とともに議論を深めた。分科会を開催して課題がはっきりした。事業をブラッシュアップし、自立した魅力発信できるような組織にしたい。都市計画法の関係で新築や空き家利用に制限がある。市へ要望したい。

自己評価：90点

加 点：参加者の満足度が高かった。移住定住以外の話もできた。

減 点：地元の参加者の温度差があった。時間が足りなかった。

行動宣言：多様（関心のない住民、外部）な人を巻き込んで取り組む

<質疑>

濱（進行）：目的と目標は何か。目標は数値化できるが、目的は数値化できない。

田中（発表者）：目的は地域の求心力を高めること。目標は小学校の存続。

質問者：空き家物件の利活用について、もっと詳細に知りたい。

田中（発表者）：町会長を通して空き家、空き地の物件を調査し、貸出可能な物件についてR不動産を通してHPなどで情報を出している。都市計画法の農用地の規制があり住宅が建てられない、農家民宿もできないなどの制約がある。

【第1分科会】

東北被災地の報告から、復興のための生業や生き甲斐、被災地資源について議論した。今後の被災地支援や地域活動に生かされると思う。参加者は満足してくれた。

自己評価：60点

加 点：能登へのフィードバックとしてバリアフリーマップ作成（現在、金沢のNPOと進行中）の足掛かりができた。

減 点：東北での生業の深掘りができなかった。受け入れ体制が十分でなかった。

行動宣言：年に1回は東北へ出掛けて意見交換を続けよう

<質疑>

濱（進行）：バリアフリーは掛け算であり、どれかが0だと0になる。

赤須（コーディネーター）：震災復興である能登の仕事起こしとしてツーリズムがあり、障害者に優しいツーリズムとしてバリアフリーマップの取り組みに繋がっている。

中本（発表者）：奥能登の広域連携が不足しているのが残念。もっと広域連携を進めたい。

【第11分科会】

「こんなうまいのに何故売れない」のキャッチフレーズで、商品開発の課題、販売ルートやニーズ調査について議論した。事例が多すぎて深掘りができなかったが、今回の分科会の開催を通して、地元で愛される商品開発の重要性が分かった。

自己評価：70点

加 点：テーマに共感が多かった。

減 点：参加者が持ってきたものを食べあつたが、じっくり話す時間がなかった。参加者の特産品が沢山集まりすぎて、価値基準が持てなかった。テーマが大きすぎて、参加者の求めとのギャップがあった。

行動宣言：地元で愛される商品を開発して全国へ発売する

<質疑>

赤須（コーディネーター）：全国大会の時点では「人材育成」とされていた行動宣言が、愛される商品情報発信に変化した理由は。

柿谷（発表者）：人材育成の前に地元で受け入れられる商品づくりが大切だと思う。

濱（進行）：物の価値を一瞬に分かれば売れる。地元で愛される商品は「地消地産」である。

【第5分科会】

分科会主催者で無い者達で振り返った。羽咋のこれまでの取り組みを発表し、地域資源を活用した道の駅づくりについて議論を深めた。参加者アンケート結果から、参加者は満足したようである。

自己評価：90点 + α = 95点

加 点：わかりやすいテーマ設定が良かった。視察や座学だけでなく農場でのバーベキューは、将来の道の駅のアイデアに生かしている。コンテンツが良かった。

減 点：地元の人々の生の声が聴けなかった。過疎に対するアプローチが足りなかった。

行動宣言：分科会の内容を掘り下げ、本物の地産地消が味わえる道の駅づくり

【第6分科会】

テーマに沿って、これまで実施した取り組みを体感するとともに、裏側にある仕組みを理解し、今後の各地での実践活動として持ち帰ってもらった。参加者数目標の30人に対して14人の参加で少なかった。

自己評価：80点

加 点：笑いヨガ、ノルデックウォーク、瞑想など、議論だけでなく身体を動かすことが良かった。

減 点：テーマがわかりにくかった。時間が足りなく運営が良くなかった。

行動宣言：今回を評価して次に繋げる。

7、ゲスト講師コメント

①敷田 麻実 先生

1、活動の意味を考えることが重要だ。

能登キリシマツツジはクリアに聞こえるが、多くの人の共感は得にくい。そこで、地域のシンボルは赤である。赤はキリシマツツジであるとすれば、多くの人の共感を得られる。

2、イノベーションは2つのプロセスがある

発明と普及のバランスが大事である。良い種を沢山発明し、その中から選ぶのである。

3、共通することを他の振り返りの中から学ぶことが大事である。

<濱>

アイディアの100出しから始める。質を求めるには量を出すことが大事。

②柳井 雅也 先生

くまモンのデザインは4100枚から選んだ。夏目漱石の本に「仏師は、木の中に仏様がいて、それを掘り出す」という一文がある。ターゲットが大事である。目的を見つけるにはターゲットを明確にしなければならない。1本1000円の万年筆がある。ペン先に目を付けたアイディアである。ペンを握って目を見ると良い姿勢で書けるのである。マネージメントをしっかりとプロモーションすることが大事である。

プレイヤーのキーワードは「どんな人に住んで欲しいか」を明確にすることである。神山町の移住促進活動は、地域資源を生かすことであり、それに相応しい人かどうか客にフィルターをかけている。フィルターリングすることが大事である。

日本人は諸外国から非効率だと言われている。手間暇かけるのは非効率ではない。こだわりであり手わざ、手仕事である。付加価値をつけ意味のある手仕事が重要である。

同じものを持っている者や地域、異なった資源を持っている者や地域が、いろんな連携、広い連携で価値を高めていくことが重要である。

四万十の畦地さん達は、売り上げの一部を植林に使っている。地域づくり活動の利益の一部を還元している。

地域づくりは人づくりに始まり人づくりに終わるのである。